

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Maternal Birth Weight is an Indicator of Preterm Delivery: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊婦の出生体重と早産との関連

ユニットセンター(UC)等名:宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Developmental Origins of Health and Disease

年: 2024

DOI: 10.1017/S2040174424000126

筆頭著者名: 工藤 理永

所属 UC 名: 宮城ユニットセンター

目的:

世界全体の早産率は約 10%と言われており、日本を含め世界全体で早産は増加傾向にある。早産児では新生児死亡率や様々な疾患の罹患リスクが上昇する。早産のリスクとして、妊娠高血圧症候群、子宮内感染、生殖補助医療などのいくつかの危険因子が指摘されているが、未解明の要因も多い。また、母体出生体重と早産の関連についての先行研究の結果は一致していない。本研究は、日本人集団における母親の出生時体重と早産との関連を調べることを目的とした。

方法:

エコチル調査の 3 歳時全固定データを使用し、78,972 人の妊婦を対象とした。妊婦の出生体重と早産の関連について多変量解析を行った。早産(妊娠 22-36 週の分娩)については、多重ロジスティック回帰分析を使用した。また、早期早産(妊娠 22-33 週の分娩)および後期早産(妊娠 34-36 週の分娩)については、多項ロジスティック回帰分析を使用した。

結果:

早産は 3,555 例、早期早産は 704 例、後期早産は 2,851 例であり、母体出生体重は早産、早期早産、後期早産と逆相関していた。母体出生体重が 500g 減少する毎の調整オッズ比は、早産で 1.167(95%信頼区間 CI: 1.118-1.218)、早期早産で 1.174(95%信頼区間: 1.070-1.287)、後期早産で 1.151(95%信頼区間: 1.098-1.206)であった。

考察(研究の限界を含める):

本研究は、日本人集団における母体出生体重と早産の逆相関を示した初めての研究である。早産の危険因子として報告されている妊娠高血圧症候群、子宮内感染症、生殖補助医療などの因子を調整してもなお、母体低出生体重と早産との関連は認められた。本研究の限界として、母体の低出生体重の原因が早産と SG(在胎期間相当の体格より小さく生まれること)のどちらか判断できなかったこと、母体出生体重は自己申告データから得られたことなどが挙げられる。本研究の臨床的意義は、母体出生体重の情報を得ておくことで、早産リスクが高い妊婦を把握し、早期介入につなげられる可能性があることである。

結論:

本研究では、妊婦の出生体重が軽いことと早産の関連がみとめられた。また、妊婦の出生体重と早産との関連は、妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病、糖尿病で説明しきれなかった。